

## 『デュルケムと現代教育』

ジェフリー・ウォルフォード他編著 黒崎勲・清田夏代訳  
 同時代社=日日教育文庫 2003年

本書は Geoffrey Walford and W.S.F. Pickering (eds.), *Durkheim and Modern Education*, Routledge, 1998 の全訳である。まず、編者によって原著に付された本書についての説明を掲げておこう。「エミール・デュルケムの教育に関する講義と著作はこれまで無視されてきた研究領域に属するものである。この主題に関する彼の著作は死後刊行され、第二次大戦の後になってようやく英語圏に翻訳されるにいたった。しかしながら、教育哲学者たちは次第にデュルケムの思想が現代教育に適用可能なものであると論じるようになってきている。本書はデュルケムの教育思想を現代教育思想のなかで以下の三つのレベルにおいて検討することを目指すものである。第一に、デュルケムの教育思想を現代社会の文脈の中で位置づけること。第二に、今日の教育問題をデュルケムの枠組を用いて考察すること。第三に、デュルケムの思考を現代教育理論に関係づけることによってその永続的な影響を明らかにすること（以下省略）。」

国家を「道徳の教師」と位置づけ、現実の教師の行為を国家の統制の下におくことが学校教育の原理となるとされ戦後教育学が定着させたデュルケム教育学説の像である。しかし、デュルケムは国家が道徳の内容を決定することを容認していない。デュルケムは明瞭に「それを欠如しては社会が存在しえない共通の観念と感情を創造することは実際には国家の権限には属していない」（『教育と社会学』）と述べている。こうしたことはすでにいくつかのデュルケム研究が明らかにしているところである（清田夏代「デュルケム教育=社会理論の一考察」『教育学年報』9、世織書房、2002年、参照）。

「国家の活動は、それを分化させていく二次的な機関の体系が存在しないかぎり、有効に行使されることはできない」（Durkheim 1893『社会分業論』）。従来のデュルケム教育学説に対する評価は、個人の自由を現実化させるために国家と二次的集団を相互に抑制と均衡の関係に置くことを目指したデュルケムの社会理論の可能性にはまったく目をつぶるものとなっている。訳者はデュルケム教育学説への関心がパターン化された批判を超えて、その現代的意義の究明に向かうことを願って翻訳にあたった。斎藤新治は最近刊行された別の著作の書評において、「教師の教育行為において児童に加えられる身体的、精神的暴力」についてのデュルケムの考察に触れ、「あらためてこの指摘に気付かせられた私にとっては衝撃であった」として、デュルケム教育学説の今日的な意義を深く認めている。編者が自負するように、教育学とデュルケム研究の両方の領域における著名な指導的研究者による代表的な研究論文から構成されている本書は、「社会学者にとっても、教育学者にとっても重要なもの」となるであろう。

(清田夏代)